

**C 型肝炎を患う患者の「病いの受容」に関する考察**  
**- 病いの語りからみえる、病いの受容要因と受容のあり方 -**

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域

本論文の研究目的は、感染性の慢性疾患である C 型肝炎を患う病者の「病いの経験」を、「病いの受容」という観点からアプローチし、受容における社会的要因（外的な要因）の影響の大きさや、病者における受容の意味を考察しながら、その心理的傾向と、受容に関わる要因を明らかにすることを目的とする。

第一章では、まず C 型肝炎の「疾患的特徴」について整理し、その疾患を取り巻く「社会的状況」について概観する。前者については、感染者数が 150 万人以上存在する我が国の実態とともに、身体的な自覚症状がないまま数十年の長期に渡って「慢性肝炎」、「肝硬変」、「肝癌」へと進行する C 型肝炎の疾患経過や、疾患における一般的特徴とともに、その治療法について言及する。そしてその疾患が「感染性」と「慢性疾患」という 2 つの特徴を有しているということから、スティグマや、慢性疾患患者特有の病者役割など、その疾患的特徴に関するこれまでの論説を紹介しながら、同様な特徴が C 型肝炎にもあてはめられることを確認する。また後者に関しては、疾患的特徴だけでなく、薬害問題をはじめとする世論や行政の動向など、C 型肝炎という疾患を取り巻く社会的状況が大きく変化していることを明らかにし、その影響が、疾患を患う人々に及んでいる可能性について触れる。

第二章では、本論で用いる「受容」、「病い・病者」の意味を明確にするとともに、C 型肝炎を患う人々に関する「先行研究の検討」を行う。前者では、第一章の背景を考慮しながら、「受容」という概念を、単に個人の責任問題としての「自己受容」として扱うのではなく、社会の側の変化も求められる「社会受容」の側面を重視した南雲の視点に立って用いる必要性を説く。そして医学的な視点で捉えられる「患者」を、Kleinman が用いる「病者」の視点で捉えなおし、文化的、社会的影響を含めた「日常を生きる病者」と、その「経験」を重視する視点を確認する。後者に関しては、これまでの先行研究が、「患者」という病者の限られた側面しか扱っていないこと、「症状」とともに「指導」や「教育」といった側面しか扱っていない点を指摘する。そして臨床心理学領域の研究を含め、受容のあり方や心理的支援の必要性に関して十分な検討が行われていない現状を指摘し、その研究と検討の必要性を唱える。

第三章では、C 型慢性肝炎と診断された 4 名の協力者の方々のインタビューの概要を述べ、その分析を行った。分析では、4 名それぞれのインタビューから KJ 法を行い、そこから浮かび上がってくるカテゴリーをもとに、各事例における受容への過程とその要因の検討を行った。そしてそこから共通して見られる要因をとりあげた。共通して見られる要因は、感染原因も含めた病気に対する「不確かさ」、病気に対する身体的、知識的な「実感のなさ」、対人関係や経済問題など「日常生活の変化と調整」であった。そしてその「不確

かさ」の中で、「身体という感覚的問題」、「知識という認識的問題」、「家族や友人、職場関係など人間関係」という3要因が、病者の「自己受容」に影響を与えており、病者を苦しめる一方で、病識を高め、受容過程を進展させる要因として存在している可能性を明らかにした。

第四章では、前章を受けた考察と、今後の課題の検討を行う。考察では、受容への過程で浮かび上がってきた要因が、病者個人の「内的な要因」であるというよりも、疾患の特徴や社会的な関係の意味合いが強い「外的な要因」によるものであることを述べる。そして疾患自体の痛みだけでなく、医療や行政制度などといった疾患以外の要因によっても苦しめられている病者の側面を明らかにする。そこから自己受容という側面よりも、先に述べた社会受容という側面が、C型肝炎を患う病者の受容にとって、より重要であるということ述べる。そして、そのような中で、研究の限界とともに、臨床心理学の立場からどのような関わりができるのか、社会臨床心理学の視点について触れながら、今後の課題としての考察を行う。